

平成9年度

生活科の活動や体験を通して育つ力の研究

— 「たくましさ」 — 友達とかかわる中で育つ力に着目して —

川崎市総合教育センター 生活科研究会議

I 主題設定の理由

1. 研究の意義

(1) 生活科の今日的課題

①生活科の現状

生活科は、「具体的な活動や体験を通して、よき生活者として求められる能力や態度を育てる」¹⁾ことを目指し、平成4年、小学校1・2年生において完全実施された。教科の目標をふまえて、子供がどのような形で自立してほしいのか、その基礎として小学校低学年では何をどのように身に付け、育てていかなければならないのか等の研究が重ねられてきた。

生活科は、「はじめに社会や自然の内容ありき」ではなく、「はじめに子どもの興味・関心、思いや願いありき」という考えに立って、一人一人の子供が、思いや願いを追究していく活動や体験を通して、生活上必要な習慣や技能を身に付け、自立への基礎を養うことを究極的なねらいとしている。教育現場ではこのような子供主体の考え方に立って、子供一人一人の思いや願いを生かす単元構想をもとに、直接体験を重視した活動を積み重ねてきた。その結果、身近な自然に眼を向けるようになった、楽しく自分の思いを生かしてものを作るようになった、友達と相談しながら活動を進めていけるようになった等、子供が意欲的に主体的に物事に取り組むすがたが見られるようになってきた。

②子供の思いや願いが生きる支援

生活科では、一人一人の子供の思いや願いを大切にす。子供自身が「～してみたいこと」「～せずにはいられないこと」が連続していくような活動を通して、その中で思いや願いがはっきりしたものになっていく。そして、見通しをもつことができるようになる。だからこそ教師は、一人一人のよさを生かすという視点に立って、子供が思いや願いをもち、それが実現できるように支援することが重要になってくる。

③体験の中で試行錯誤を繰り返しながら学ぶ

子供は試行錯誤しながら調べたり作ったり探したり育てたりする過程の中で、自ら考え、判断し、決定したり表現したりする。そこから学びとったものが新たな意欲となり、次の活動へと生かしていけるのである。これらの活動を繰り返しながら、よき生活者としての資質や能力を身に付けていくのである。

これらのことから、子供の主体的な伸びを願って生活科の授業をもう一步深めていきたい、と同時に、そういう生活科の活動や体験において、子供が自分なりの思いや願いを追究していく過程で、子供の実際のすがたを見

取り、その中でどんな力が育っていくのかを探っていきたく考えた。

④これからの生活科

また、生活科で子供が育ち、ついた力は「自分で課題を見つけ、自ら考え、自ら問題を解決していく資質や能力」という「生きる力」にもつながっていくであろうと思われる。そう考えると、子供が思いや願いを追究していく過程で育っていく力を探ることは、その力が、教科や学年を越えてどのように発展していくのかを探る手がかりにもなるであろう。

これらのことから本研究会議では、生活科の活動や体験を通してどんな力がついてきているのかという視点をもって、生活科の授業で見える子供のすがたを単元を通して見取っていくことが必要であると考え、この研究を出発させた。

(2) 主題設定までの経緯と研究のねらい

生活科の授業で見た1・2年生の子供たちの日常のすがたから、本研究会議の「育てたい子供のすがた」を【思いや願いをもって自分の力で切り拓いていく子】ととらえ、そのすがたを「たくましさ」とした。

1年目は、生活科の授業を通して、どのように思いや願いを追究していくのかを実際の子供のすがたで見てみた。

その結果、まず活動の始めの段階で自分の思いや願いがもてるようになると、より活動に積極的に取り組む子供のすがたが見られた。「～したい」「やれそうだ」「やってみたい」というその子供なりの思いや願いがきっかけとなって、子供にとって必然性のある活動となり、活動がスタートしていった。

また子供が思いや願いを実現しようとするその追究の過程で、自分で見つけたり、考えたり、工夫したり、友達に教えてもらいながら粘り強く活動に取り組んだりする子供のすがたを見取ることができた。

そして自らの力で挑戦していく過程で、あるいは思いや願いが自己実現できた後に、また新たな気付きが生まれる。ここで、友達に認められることで自信がついてまた次の活動へと進む子供のすがたを見ることができた。

これらのことから、自分の思いや願いを追究していく過程の中で、友達とのかかわりが次の活動への意欲や自信につながる上で大切になるのではないかと考えた。

そこで、2年目は「友達とかかわる中で育つ力」に焦点を当てて探っていくことにした。

従って研究のねらいを次のように定めた。

子供が自分の思いや願いを追究していく過程で、友達とどうかかわっていくのかを実際のすがたから見取り、その中で育つ力を探る。

¹⁾【新しい学力感に立つ生活科の授業の工夫】 文部省 1995 P7

2. 研究の仮説

昨年度の研究において生活科の授業で見取ることのできた子供のすがたから、友達とかかわる中で育つ子供のすがたを下のような図に表した。(図1)

研究の1年目に実施した検証授業A小学校2年生「おもちゃランドを開こう」を例にとってみる。

まず、子供一人一人が「こんなおもちゃを作りたい」という自分なりの思いや願いがもてるようにして活動のきっかけを作り、活動がスタートできるように支援する。

この授業では、自分の考えたおもちゃを作っていく過程で、下記のように友達といろいろなかかわり方をしていく子供のすがたを見ることができた。

- ・自分が一緒に作りたと思って、一人で作りたという友達の願いを知ってそれを受け入れる。
- ・友達の考えを聞いてわかる。
- ・友達の作ったおもちゃがおもしろいと言って借りて遊ぶ。
- ・自分の作ったおもちゃで友達と競争して遊ぶ。
- ・友達と力を合わせながら作る。

・友達に教えてもらって自分の力でできる。

このような子供のすがたが見られたことから、子供が友達とのかかわりをより広げていけるような場面を設定することによって、思いや願いを追究していけるのではないかと考えた。

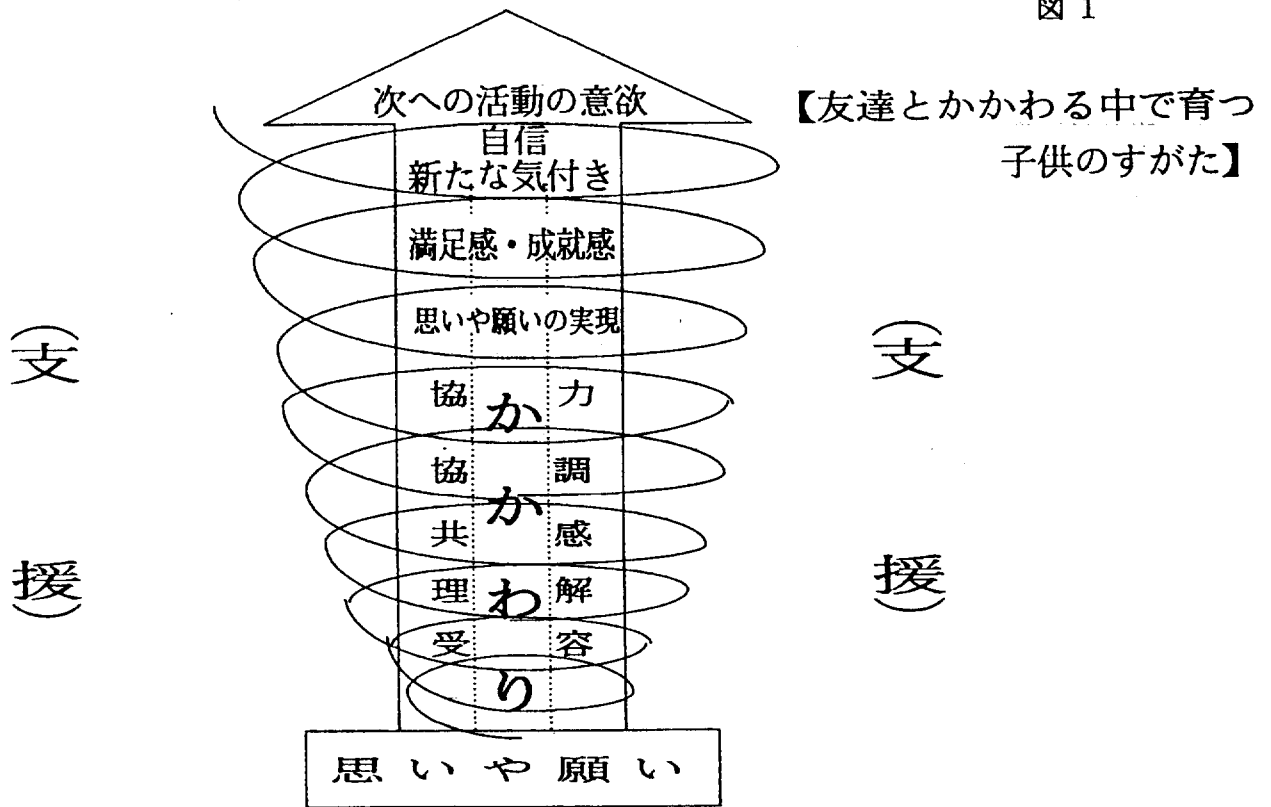
そして、問題が解決したり、おもちゃが完成したりした時、即ち思いや願いが実現した時に、満足感・成就感をもつ。こういう体験が積み重ねられて自己実現できたことの充実感を味わう。この思いや願いの実現は、新たな気付きを生み、自信へとつながり、それが次の活動への意欲となり、また自分なりの思いや願いが生まれてくるであろう。そのために教師は、子供の思いや願いを把握し、一人一人に応じた励ましの言葉をかけたり、温かく活動を見守ったり、共に活動したりして、子供の気付きをさらに広げるような支援をしていくことが必要になってくる。これらの活動を繰り返していくことによって、「たくましさ」が育ち、「思いや願いをもって自分の力で切り拓いていく子」になるであろうと考えた。

よって本研究会議では、次のような仮説を設定した。

思いや願いをもって自分の力で切り拓いていく子

【たくましさ】

図 1



- 何でも人の後からついてやる
- ちょっかいを出す
- まねをする
- 素直に従う
- 相手のいうことをきく

- 話しかける
- 相手の言うことがわかる
- 一緒に遊ぶ
- 他の場所の人と付き合う
- たたく
- 文句を言う
- 言うことをきかない

- 意見を聞いて一緒にする
- 言うべきことを言う
- どういふかかわりをするか考えてみる
- 誰かに相談する
- 約束を決めて行動する

これらのすがたは、一人一人の子供によって違う。必ずしもこの順序通りの経過を経るとは限らないし、同じすがたを繰り返していくこともあるであろう。そうしているうちに共に活動するようになり、友達よさに気付いたり、自分のよさに気付いたりしていくであろう。

もちろん必ずしも共になかよく活動することが自分の思いや願いの実現につながるわけではない。友達の思い

や願いとぶつかったり、自分とは違う価値観で活動している友達のすがたに出会って迷ったりもする。また友達のすがたを見て自分と比較し、友達よさに気付いたり、友達から賞讃されて自分のよさに気付いたりもする。このように様々な問題に直面する中で友達とかかわりながら思いや願いを実現し、自分に自信をもって生きようとしていくであろう。この繰り返しで「たくましさ」が育つと考えている。

本研究会議では、友達とかかわりながら育つこの子供のすがたを、次のように考えることにした。

【友達とかかわる】

共に励まし合い支え合いながら、自分の願いを追究し合うすがたであり、たくましい自己を形成しようとする過程である。

励ます・支える

自分⇄⇄⇄⇄⇄友達

⇄⇄⇄⇄⇄

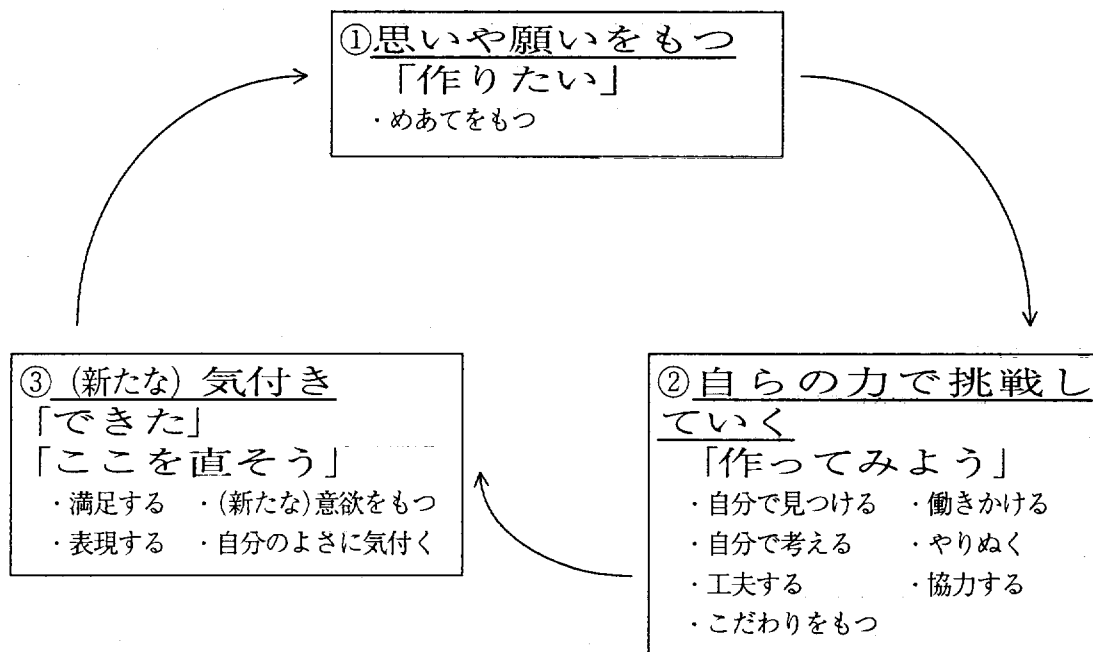
(2) 【友達とのかかわり】を見取る方法

① 着目児の観察・記録

単元を通して、特に友達とのかかわりの中で育ってほしいと願う子供を着目児として、行動やつぶやきをひろって記録する。

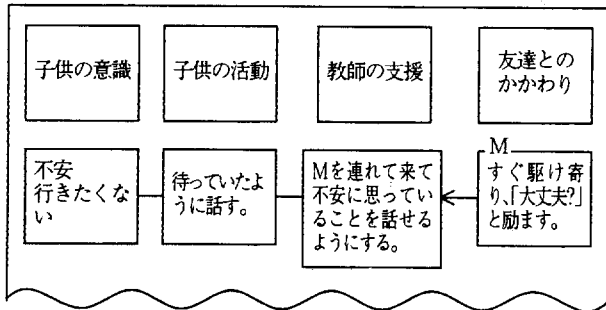
「たくましさ」が育つ課程

図2



②【友達とのかかわり】を通しての育ちの記録

活動記録や振り返りカードから、実際にどの場面でどんな支援をして、その後子供はどう活動したか、場面ごとにどんな友達とどうかかわっていったのかを、具体的な子供のすがたで記録し、着目児ごとに次のような形の育ちの記録を作った。これを単元全体を通して子供を見取っていく時の手がかりとした。



2. 授業について

(1) 単元名「行ってみようよ、町たんけん」ー2年生

①単元を通してのねらい

「学区の春を見つけたよ」で、よもぎを見つけ、「よもぎだんごを作ろう」という願いが生まれ、よもぎだんごを作ったこと、「遠足のおやつを買いに行こう」で、「駅の側のお店に行ったよ」「友達と買いに行き楽しかったよ」という感想が出てきたこと。これら「2つのミニ町探検」から、「もっと町のことを知りたい」という子供たちの願いが出てきた。こういう子供たちの思いから、近隣にまで学習の場を広げて活動することにより、自分を中心とした友達や友達の家族、近隣の人などとのかかわりが深まっていくであろう。

また、自分で探検したいところを決めて、友達とかかわって活動する中で、次の活動のきっかけができたり、もっと探検したいという意欲も生まれるのではないだろうか。そして「探検する」という共通の目的をかなえるために、友達と力を合わせることにより困難なことも乗り越えられるのではないかと考えた。これらの活動を通して、本研究会議の願う【思いや願いをもって自分の力で切り拓いていく】即ち【たくましさ】を身に付けてほしいと考え、この単元を設定した。

さらに、ここで培った地域を見る眼が3年生以降の社会科で、地域のことをもっと詳しく調べたり、かかわったりしていく態度へとつながっていくのではないかと考えた。

②着目児Aについて

町探検をしたいという願いを実現するために、友達とかかわることによって、その願いが具体的なものになり、実現できる。さらにそのことで自信がもて、より積極的に友達とかかわりながら行動するようになってほしいと

考え、Aを着目児とした。

ふだんは穏やかで友達と話したり活動したりする。

一度つまづいたり新しい事柄にぶつかったりすると、自分でそれを乗り越えるのを避けたり、乗り越えられても時間がかかったりする。

家庭では一人っ子ということもあり、大事にされており、生活経験が少ない。

みんなの前できちんと発表するのが苦手で、朝の会のスピーチや感想の発表になると、「ない」とか「明日言う」と言ってなかなか言えない。友達のあげあしをとったようなことを言うことはある。

生活科については、新しい経験をするとなると他の子供以上に不安感を強く表すので、友達や教師の励ましを必要とする。自信がもてるととても楽しく友達と活動することができる。従って自分の思いや願いがもてるように、活動の始めの段階で教師が声をかけたり、友達とかかわりながらつまづきを乗り越えられるように配慮したりする必要がある。

③友達とかかわる中で期待する育ち・つきたい力

友達とかかわる中で	期待する育ち・つきたい力
<p>友達が行きたい場所や目的を発表するのを聞いたり、一緒に相談したりする。同じコースに行く子と話し合ったり、一緒に今までの経験を思い出したりする。友達の活動を見て、自分の方法と比べてみる。</p>	<p>友達の考えを聞く中で、探検したいところや目的が見つけられる。</p>
<p>友達から励まされたり助言されたりして、意欲をもったり活動の仕方がわかったりする。</p>	<p>準備や計画の段階で、友達と話し合う中で、どうすれば自分の願いが実現するか、少しでも見通しがもてる。</p>
<p>友達の影響を受け、自分で少しずつ考えたり行動できたりするようになる。</p>	<p>友達の考えを受け入れ、自分の願いや活動する幅を広げたりすることができる。</p>

【見通す】

【計画する】

【実践する】

いろいろな表現方法を知り、自分なりの方法で探検したことを発表する。

町探検で見つけたことや楽しかったことを自信をもって表現することができる。

【表現する】

④友達とかかわっていったすがた ー単元を通してー

初めて友達の前で発表できたA

朝の会での「町の秘密教えてあげるよ」の発表で、Aは次のように発表した。

「家の近くに蟻の巣がいっぱいあるよ、卵もあったよ」最初は「町探検に行きたくない、迷子になるから」と心配そうであった。そこで教師は、やはり一人であったMに声をかけた。



第2時 Mに声をかけ、Aとかかわるようにする支援

T：(Mに) Aさんが困っているみたいだよ。

(Mは急いでAのところへ行って)

M：大丈夫。(と言いながら駆け寄る。)

A：知らない所へ行って道に迷うのが心配。(来てくれるのを待っていたようにいろいろ話し出す。)



Aは、教室の前にある地図を自分から取りに行く。

ーAの思いや願いー

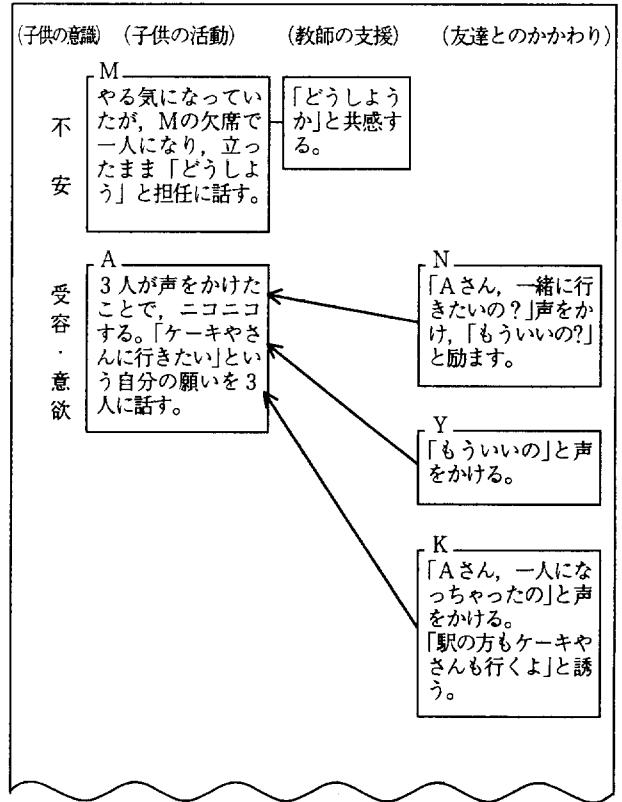
駅にも行ってみたい。(とMに向かって話す。)

教師が、Aの側に寄って肩に手をかけながら、「探検に行くのが心配なんだよね」と声をかけたが、これは事前アンケートや聞き取り調査で、下記のようなAの思いを知っていたからである。

単元に入る前の調査で、「宮崎台のことはあまり知らない」と答え、「宮崎台のことを知りたいか」という質問に対して、「知りたくない」「迷子になるから」と答えている。単元の1時間目でもやはり、「行きたいところは東急ストア」だが、「迷子になりそうで心配」と言っていた。このことから、みんなで考え友達と活動するよさを知らせたいと考え、教師はMに、「Aさんが困っているみたいだよ」と働きかけ、MとAと一緒に相談できるようにした。その結果、AがMに不安に思っていることを話し、Aは安心して「駅にも行ってみたい」と自分なりの願いがはっきりもてるようになった。

そして、第2時では、Aは、Mの持っていた机上にあ

った赤鉛筆を自ら取り上げて地図に書き込む積極的な姿勢が見られた。



上記は第3・4時の【友達とのかかわり】を通しての育ちの記録である。第3時に、Aは探検の準備をしようとしていた。ところが一緒にやろうとしていたMは、強く誘われてTと探検することになった。そのためAは再び一人になり、立ったまま「どうしよう」という話を担任にしてきた。その様子を見て、N・Y・Kの3人がAに声をかけてくれた。そして、N・Y・K・Aの4人の探検グループができた。



ーAの思いや願いー

N・Y・Kと一緒にいきたいな。



第5・6時 N・Y・Kとかかわり、思いや願いの実現 (4人で町探検できた。)

(Aの振り返りカードから)

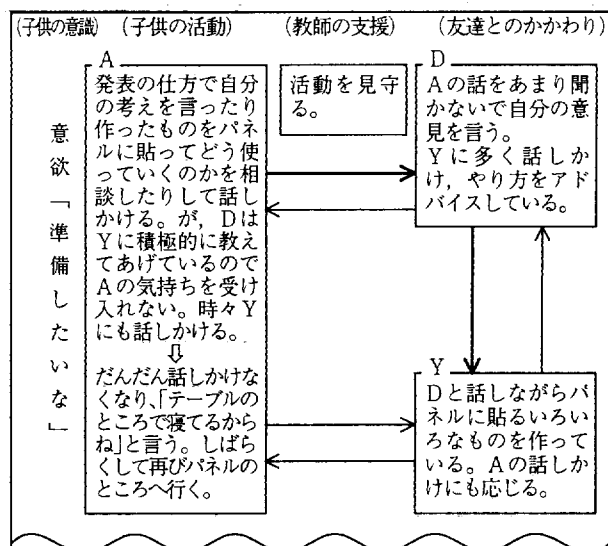
ケーキやさんでケーキやのおじさんとはなしをしたよみんなおいしそうだったよ。もっとたのしかったのはこうえんでのずえさんとぼらんこをしたのがおもしろかったです。ふたりのりでたかくとんだからこわかったです。でももういっかいのりたいたいです。

探検したところはミスタードーナツ・末広庵・駅・ケーキやさん(エルム)であった。「ケーキやさんに行

きたい」という願いが実現でき、しかも友達と行くことができた。さらに公園で友達とぶらんこにもものごとができて楽しかったということが、満足感・成就感につながったのであろう。探検から帰ってきて書いた振り返りカードでは、「たのしかった」「おはなししたよ」の2つの項目に○をつけていた。上記の振り返りカードだけでなく、探検から帰ってきた時の生き生きとした表情からも、楽しく活動したことを見取ることができた。

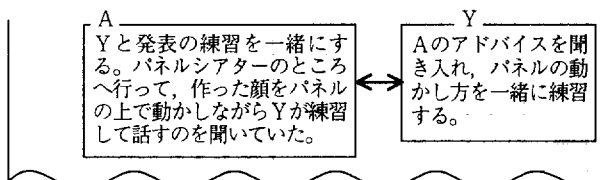
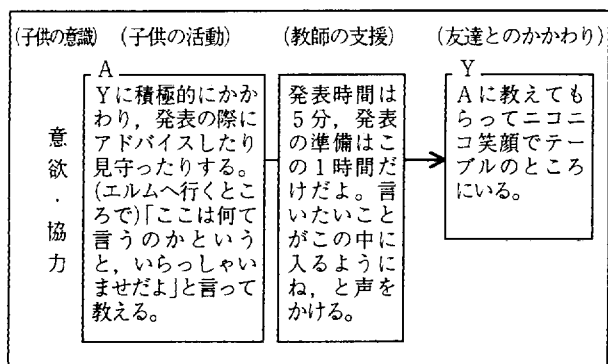
第7時の町探検の発表会の準備の時間になると、Aはパネルシアターの方法を教師から教えてもらい積極的に準備を始めた。発表形態は同じパネルシアターでも探検してきたところが友達と違うので、自分の見てきた駅の人の顔を作ってパネルに貼ったりしながら一生懸命に取り組んだ。が、途中でAの願いと頼りにしているDの願いとがずれてきて、下記のように葛藤の場面があった。

↓



この後は、また活動への意欲が出てきて、Yの作業の様子を見たり、パネルを貼ったりしているDについて歩いたりしていた。

次時の「発表会の準備をしよう」で、Aの友達とのかかわり方に大きな変化が見られた。



準備の段階でAは、パネルシアターのやり方がわかるとこつこつと準備をしていたので、この時は自分のパネルはもうできており、心の余裕があったと思われる。Yに「ここで貼るんだよ」と発表の仕方を教えていた。今までになかったことであった。

「町探検の発表会をしよう」では下記のようなすがたが見られた。

恥ずかしがり屋なため、発表するところでは照れながらであったが、探検してきたことをみんなの前で発表できた。これは2年生になって初めてできたことである。途中で発表が途切れると周囲の友達が、「それで?」と発表を促す場面もあった。発表の後みんなの拍手を浴びていた。

⑤単元を終えて

この単元でAは、最初は自分から友達とかかわることはなかったと言ってよい。始めはMから、次にN・Y・Kがかかわってきてくれた。そしてDから誘われた。

ほとんどが受動的なかわりであった。町探検ができた後、後半の発表会の場面ではYにやり方を教えるなど、積極的に自分からかかわっていくすがたが見られた。

そして友達とかかわる中で、下記のような育ちを見取ることができた。

- ・友達の考えを聞く中で、自分の行きたいところが見つけられたり、その願いをかなえるための準備や計画を立てられた。
- ・楽しく町探検することができた。
- ・町探検で見つけたことを友達に発表できた。

みんなの前では照れてなかなか話すことができなかつたAが、「町探検の発表会」や「ここをつたえよう」という単元の手紙を書いて発表する等の生活科の表現活動を積み上げる中で、書いたり話したりできるようになってきた。最近ではメモしたことに付け加えて発表するすがたも見られるようになってきた。

(2) 単元名「生き物となかよし」-2年生

①単元を通してのねらい

2年生に進級して、子供たちは「春さがしをしよう」の活動を通して様々な自然にふれることができた。「ギザギザの葉っぱがたくさんあったよ」「いい匂いの花を見つけたよ」「食べられるものもあるんだね」「校庭のすみっこにクモの巣があったよ」など多くの気づきがあったことが、振り返りカードから見取ることができる。

これらの中から「虫を見つけたよ。今度また捕まえないな」「別なところも探検したいな」という願いを柱にこの単元を設定した。生き物を野外で捕まえたり飼ったりする活動を通して、それらの生き物の暮らしや成長の様子に関心をもち、自分たちと同じように成長していることに気づき、生き物を大切にすることを育てたいと考えた。

自分たちの捕まえた生き物を「飼いたい」「育てたい」という願いを実現する過程で、研究会議の願う「たくましさ」のある子、即ち「思いや願いをもって自分の力で切り拓いていく子」に育ててほしいと願っている。そして、生き物を飼ったり育てたりする中で、友達からえさやすみかのことを教えてもらったり、一緒に世話をしたりして友達とかかわっていくのではないかと期待感をもっている。さらにこれらの活動を通して培われた調べたり観察したりする眼が、3年生以降の理科学習に生きていくのではないかと考える。

②着目児について

クラスのひとつの子供が「虫をつかまえたり飼ったりするのが好き」と言っている中で3人が「きらい」と事前のアンケートで答えた。「きらい」と答えた子供の中から、自分なりのこだわりはあるがなかなか友達とかかわれないBを、友達の影響を受けながら虫の世話や飼う活動を通して育ててほしいと考え、着目児とした。

姉と二人兄弟。家で姉によく面倒をみてもらっている。

自分から何かをやるという積極性や行動力のあるタイプではない。学習面も含めて指示を待っている方である。

「自分にもできる」という自信がもてるまで、行動をおこしたり友達をはじめとする人とかかわったりすることができないでいる。

経験ずみのことは友達がいなくても平気である。こだわった行動をとる。

特定の男の子とは遊ぶが、女の子と遊ぶことの方が多い。好きな子と一緒になれないとすねることもある。

③友達とかかわる中で期待する育ち・つきたい力

友達とかかわる中で	期待する育ち・つきたい力
友達とヤゴ捕りや虫捕りをして自分も活動しようという願いをもつ。	【見通す】
朝の会などで、友達の話を聞いたり、友達の捕った虫を見せてもらったりして虫に興味もつ。	

虫のいる場所や捕り方を見たり聞いたり、虫を捕る計画を友達と相談して決めたりする。

捕った虫を見たり教えたりする。

虫を飼っている様子や虫についての情報を友達から得る。

友達と協力して、今まで飼っていた虫について、1年生に知らせる。

虫を捕まえたり飼い方を調べたりして途中でやめずに世話をする。生き物に対する自分なりの気持ちももてるようになる。

今までの発表の仕方を思い出し、表現方法を工夫する。認められたことで、これからの活動を進んで行おうとする。

【実践する】
【表現する】
【自信】

④友達とかかわっていったすがた一単元を通して一

活動のきっかけができて頑張ったB

一人一人が虫にふれる機会をもつ・虫を通して共通の体験をすることが大切であると考え、単元に入るきっかけとして、プールでヤゴ捕りをする活動の場を設定した。

5クラス全員でプールで行ったこの活動でBは、イチゴパックを網の代用にし、小さな水槽を持ってきた。懸命にヤゴをすくおうとするが1匹もとれず友達から1匹もらい、家で飼うと言って持って帰った。

事前のアンケートによるBの答えは次のようであった。

虫を捕まえたり飼ったりするのは好きですか	虫や生きものを飼ったことがありますか	どんな虫(生き物)を飼ってみたいですか	2年生になってどんな虫をみましたか
きらい	金魚	トノサマバッタ	アゲハ

「学校の近くで虫のたくさんいる場所は？」の問いには無回答であった。

プールでのヤゴ捕りの活動から「また別の虫も捕まえないな」という子供の願いが出てきて、近くの第4公園に虫捕りに出かけた。ここではお互いに特に誘い合っという形ではなく、自然にBはFと一緒に虫捕りをした。

コオロギのいる場所を知らせ、捕る手伝いをする支援

↓

第3・4・5時 第4公園でFと虫捕りをする

F：B君は何捕まえる？

B：セミ捕りは得意だよ。

F：セミはもう死んでるよ。何がいい？

B：バッタ。

F：バッタは帽子で捕るんだよ。

(虫が好きであるが、自分の願いを実現するとすると友達とトラブルを起こすことの多いFと組んでの活動だった。FがBをリードする形で活動が進んだ。

Fが持ってきた網を貸してもらえず、Fが網を持ちBはトンボの居場所を知らせていた。しばらくしてコオロギを捕りうれしそうだった。)

ここでは、Bはバッタとコオロギを捕まえることができた。虫を飼うことにあまり意欲的でないが、自分の捕まえたコオロギとバッタを「家の人に見せる」と言って家に持って帰った。その後「家で死んでしまった」とがっかりして教師に話した。その後、また虫に対する興味が失われたかのように見えた。教師は捕まえた虫を飼ったり世話をしたりする活動が、長期的に、常時活動となって虫に興味をもてるようになればよいと願っていた。

↓

第7時の「虫のすみかを作ろう」の活動では、自分の捕まえた虫が死んでしまったので、初めは、机にひじをつけていて、あまり意欲的ではない。話し合いの中で、カタツムリのウンチの話になった。それに興味を示し、知っていることを積極的に話し出す。何の世話をしているのか困っていたBであったが、この話し合いをきっかけに、ひじをつくのをやめ、挙手して発表し、話し合いの中心的存在となる。

活動のきっかけとなった支援

(導入のカタツムリのウンチの話し合いの中で)

H：カタツムリは食べたえさの色のウンチをするんだよ。

T：他にもカタツムリのことよく知っている人いる？

B：僕、デンデンムシのことくわしいよ。

T：そうだねえ。じゃあカタツムリの世話をしてみないか？(と勧める)

B：うん。

この教師の支援によってカタツムリの世話をする活動のきっかけができた。

—Mとカタツムリの世話をすることでかかわる—

B：先生、土入れたい。

T：生活科ルームのところの土を入れておいで。

(Mと一緒に生活科ルームに行く。)

B：M君、もうそのくらいでいいんじゃない。

(校庭にえさのキャベツを取りに行く)

(シジミチョウを捕まえようとする。)

B：こんなシジミチョウ捕まえるの簡単。

(また捕まえるが、掌から逃げてしまう。)

まっちゃん、そこにシジミチョウいるじゃん。

M：(葉っぱを投げる。)

(この後、えさやすみかのことをもっと知りたいと図書室へ行き、図鑑で調べていた。別のカタツムリを探しにも行った。)

ここでは主にMと一緒に行動が多かったが、他にIやS・A・Nの4人にカタツムリを見せたり、えさ用に合ったサツマイモの葉やキャベツを見せたりもしていた。

↓

—第8・9・10時—1年生を呼んでの虫の発表会—

「しんけいすいじゃくどうですか」「たのしいよ。たくさんきてね」のポスターを作り、配る。

「いらっしやい、いらっしやい」と呼び込む。

紙に来てくれた子の名前を書いて人数を調べる。

プレゼントをあげたり、カタツムリをもたせてあげたりしてたくさんの1年生とかかわる。拍手もした。

⑤単元を終えて

Bは、FやM、I・S・A・Nとかかわる中で、実際にヤゴ捕りを体験し、コオロギを捕まえることができた。カタツムリのえさを取ったりすみかを作ったりする活動ができた。これらの活動をきっかけにして自信もったことが、1年生に知らせる会で、自分から準備をしたり説明したりする活動につながっていったと思われる。その後カタツムリは逃がしてあげた。そして、今は家でハムターを飼っている。「電車に乗って小さな旅」の単元では「○グループに入りたい」という意思表示をはっきりするようになったり、おもちゃ作りでは自分なりに工夫するすがたも見られたりした。

(3) 単元名「できるようになったよ」－1年生

①単元を通してのねらい

生活科の授業や朝の会での発表、日記の紹介の場面で出てきた「給食当番の仕事や掃除が上手になったよ」

「家でおにぎりやサラダを作ってみたよ」「上ばき洗わずとやっているよ」という子供たちのつぶやきをひろって、土曜日に実際にみんなで「上ばきを洗おう」という活動につなげていった。この活動が家でも「自分のことを自分でやる」よいきっかけとなるであろうと考えた。と同時に、家の仕事的一端を実際に経験することで自分と家族とのかかわりに目が向けられ、「家族の役に立つ自分」への気付きにつながっていくようにと願ってこの単元を設定した。さらに各家庭に協力を依頼し、友達だけでなく、家の人にも「～ができた」ことを認められることが自信となり、「たくましく」新たな思いや願いを追究してほしいと考えた。

また、上ばき洗いをきっかけに、友達が家で自分でできる仕事をしていることを知ることによって、友達のよさに気付いたり教えられたりして、自分も意欲的に取り組もうとするすがたを期待した。

さらにできるようになった仕事を発表する場面で、「家族の役に立つ自分」という家庭でのすがたを学校で紹介し、「すごいね」「がんばったね」と友達に認められることによって、自分のよさに気付き、それが次の活動への意欲につながるようにと願った。

②着目点について

自分で何をしたいのかを決めるまで時間はかかるが、自分なりの思いや願いがもてるCを着目点とした。Cは自分の願いを実現するのに友達とのかかわりが必要であり、そのかかわりを通して自信をもたせたいと考えた。子供が自分の願いにそって家でできる仕事に挑戦し、続けるためにCの家庭に特に協力を依頼した。

幼稚園の時から母との分離に不安が大きく、入学後も一緒に登校することが多かった。3学期からは一人で登校している。

友達とのかかわりは、初めは女の子とかかわっていた。それからおとなしい男の子と遊んだりふざけっこしたりするようになり、その友達の数もふえ友達関係を広げられるようになってきた。嫌なことをされると、前は泣きだけだったが、最近では力でやり返すようになっている。

まわりの気が付く友達にいろいろと支えられている。自分でもそれに気付いている。それに何となく頼っているようにも見える。

ふだんは友達のやることを見ながら、自分のやりたいことを見つけている。そのやりたいことがさえぎられると簡単にあきらめてしまう。表情や視線では自分の気持ち

を訴えているが、それを言葉に出して言う勇気をもってほしいと願っている。そのためには小さな自信の積み重ねが大切であろう。

教師の手だてとして、自分がやりたい仕事を見つけ、続けてやろうと努力できるように励まし、友達に認められることで自信がつくような場面を多く作っていきたいと考えた。

③友達とかかわる中で期待する育ち・つきたい力

友達とかかわる中で	期待する育ち・つきたい力
友達と上ばき洗いをして自分も活動しようとする願いをもつ	新しいことでもむやみに不安を抱かず、友達の様子を見て考え、これならできそうだと見通して取り組みようとする。 【見通す】
友達から教わって、自分も家でやってみようとする。	家でやることを決め、家の人に相談して続けてやる。途中でやめずに挑戦する努力をする。すすめてやる中で、おもしろさ、続ける意義に気付く。 【実践する】
家でやったことを友達に紹介する。その中で認められたり励まされたりして自信をもち、新しい活動をしようとする。	友達に言葉で説明する。 みんなが聞いてほめてくれたという満足感・成就感がもてる。 【表現する】 【自信】
	認められたことで、家でも自分から家の仕事を進んでやろうとする。 【実践する】

④友達とかかわっていったすがた－単元を通して－

友達の働きかけを待つ方から、友達へ働きかけ始めたC

「こんなことができるよ」の事前アンケートでは、「勉

強道具をそろえる」「上ばきを洗う」「食事の片付けを手伝う」「給食のナフキンを用意する」の4つとも自分でやっていると答えた。ただ着る洋服の用意だけは母にやってもらっていると答えた。

身のまわりのことは、洋服をそろえることを除いて大体自分でやっていると知っている。いつもしている家の手伝いは「ない」と答えている。そして教師が知りたい「教えられる自慢の仕事」及び「教えてほしい仕事」も「ない」という回答であった。

家庭での様子を母親に聞くと「お手伝いは、日によって、頼んでもやってくれる時とやってくれない時がある」とのことであった。

他の子供の「上ばき洗い、ずっとやっているよ」というつぶやきをひろって実践した「上ばきを洗おう」では、初めはとても不安そうで笑顔がなかった。

そこで教師は、下記のようにリードしてくれる友達と一緒に活動することでCの不安感がやわらぐのではないかと考えた。

第1・2時 Kに声をかけ、Cとかかわれるようにする支援
同じ班のKに「Cさん、やったことがないから心配なんだって」と話し、二人がかかわれるように大きめのたらいを渡す。

Kは、たらいの水を一人で運び、Cに「僕って力もちでしょう」と話しかけながら、楽しそうに最後まで洗っていた。

そんなKのすがたをみて、始めは不安そうだったCもKについて動くうちに少しずつ笑顔が出てきた。洗い終わってたらいの水を替えてもらうのをじっと待っていた。

洗い終わって書いたCの振り返りカードから
お父さん、あのね。
きょうがっこうではじめて、うわばきあらいをしたよ。
またやるかなあ。ほんとにやるかなあ。
はやくやりたいなあ。
もっとやりたいよ。

この文章から「早くやりたい、もっとやりたい」という次の活動への意欲や期待感が見取れる。

第3時で欠席したために「教えてあげるよ」の実践に入る前の時間に、教師が「どれを習いたいのか」と聞いた。「お米とぎがいいな」という答えが返ってきた。

第4時

習いたい米とぎを教わっているすがたを見守る支援

お米とぎのグループは6人である。C以外の5人は、積極的に友達がといでいる間も待てない風である。Cは心配そうにのぞきこんでいた。そのうちにといでいる友達の手元をじっと見ている。しかし流し台から一番遠いところから見ている。

M・W・Z・R・Iとかかわる中で米とぎをする

R：(グループの教え役として初めてといで見せる)

C：(Rのとく指先をじっと見ている)

(その間みんな交替でとく)

Z：やった?

C：ううーん。

C：(促されてお米をとぐ)

T：冷たい?励ます支援

C：(うなずく)

T：C君上手。できたー。

C：(ホッとした様子)

同じお米を何回も洗っているので、教師が「もう一回やるの?」と聞き、「ざるにお米を用意して。もう一回やっていいよ」とグループに支援する。

Zに励まされ、お米を計って入れる

Z：やってみたいの?お米1カップ。(促す)

I：いいの、入れちゃえば。

C：(言う通りにする。徐々に表情和らぐ)

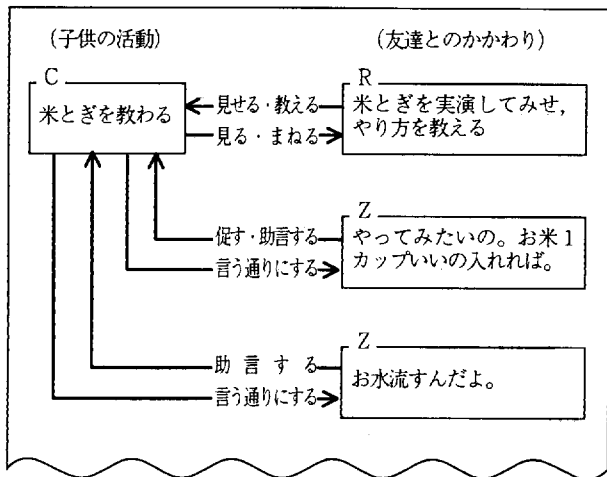
W：(水を)流せ。

I：わかったよー。

C：(言う通りに水を流し、ざるのお米がこぼれないようにする)

第4時は、友達とのかかわりがより広がるように設定した教え合う場である。Cがどう友達とかかわっていったかを次のように育ちの記録にまとめた。

「お米とぎ」のコーナーにいる間、「せんたくものたたみ」のコーナーや「サラダ」のコーナー、「目玉焼き」のコーナーを時々ちらっと見たりしていた。「お米とぎ」が終わると、「せんたくものたたみ」のコーナーにIたちと行った。



「せんたくものたたみ」のコーナーへ

Iの後をついてコーナーの前にある白いトレーナーをたたもうとするが、Nが先にそれを取り、たたんでしまう。何も言わずじっとそれを見ていた。自分のやりたかった仕事を取られてしまっても言葉には出さなかった。この後やはりIの後について「サラダ」のコーナーに行く。教室に帰ってみんなと一緒に試食させてもらう。その後振り返りカードを書き、教師がみんなの前で読んでいった。

「お米とぎを教わって…Cの振り返りカードから楽しかった。Rさん、教えてくれてありがとう。」

お米とぎが友達に教わりながらできたことの喜びとRへの思いがこのカードから読み取れる。

この後は常時活動で「家でもやって見よう」と活動が始まった。お米とぎ・お風呂洗い・窓しめ・食器並べ等自分がやりたいというお手伝いを決めて、1週間ぐらい続けることになった。

併せて、家庭に、家での仕事の様子をビデオに撮ってもらうよう趣旨を話し、協力を依頼し、冬休みに入った。

下は継続して行えるように工夫した「お手伝い大作戦」の記入カードである。

〈Cのお手伝い大さくせん〉のカードから

月	日	やること	できたかな	おもったこと
12	16	おこめとぎ	すすんで いわれて ○ △	うれしかった

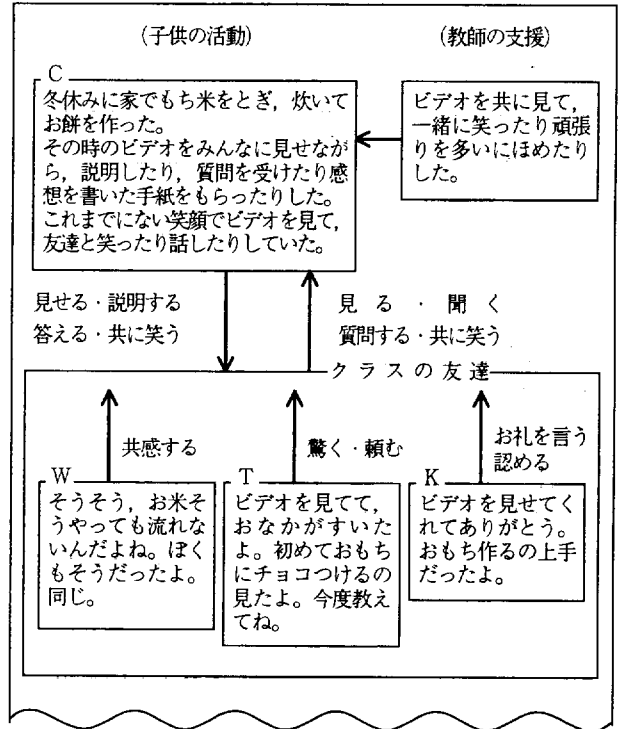
おうちの人から
初めは、「どうするの?」「これでいいの?」と言っていたが、だんだんに手順をおぼえて早くできるようになった。これからは楽しくつづけようね

じぶんのかんそう
いろいろお手つだいするものがあつたけど、やるきがでたらせつたいにできた。

家庭のあたたかい励ましとC自身の努力で仕事をし、「やる気がでたらできるんだ」という自信がついたことがうかがえる。第5・6時の発表で使ったお餅を作っているところのビデオからもやりとげたという成就感から新たな意欲を示すCのすがたを見取ることができた。

↓

第5・6時の「みんながんばっているね」の発表の場で、下記のように友達とかかわっていた。



⑤単元を終えて

この単元においてCは、実にたくさんの友達とかかわった。席も近いZは、なかなか自分の思いを表現できないCが困っていると助け船をだしてくれる。上ばき洗いでも、お米とぎの時でも積極的にかかわってくれた。Cが徐々に自分の思いを表現できるようになったのもZの存在が大きいのと考える。またお米とぎを教えてくれたR、お米とぎ・洗濯物たたみで一緒だったI、そしてM・W、上ばきあらいを一緒にやり手紙もくれたK等である。

Cが友達とかかわっていったすがたは下記のようなであった。

- ・うなずく
- ・黙って受け入れる
- ・友達のすることをじっと見る
- ・友達のすることをまねる・言う通りにする
- ・説明する
- ・質問に答える

友達がはたらきかけてくれるのを待っていたCが、第5・6時の発表では、自分から友達にはたらきかけ始め、次の単元では友達を誘うようになり、友達とのかかわり方が変わってきている。

3. 考察

生活科の活動や体験において、子供が友達とかかわり合う中で、思いや願いを追究し、本研究会議の考える「たくましさ」が育ったのかどうか、そのための手だてとした活動のきっかけとなった支援、及び友達とかかわり合いながら活動する場の設定は子供の育ちにどう影響したのかを述べる。

(1) 活動のきっかけとなった支援

本研究会議では、自分に自信がもてず、なかなか自分から友達に働きかけることができない子供を着目児として、「～したい」という思いや願いをもって活動がスタートできるような支援を心がけて活動計画を立てた。

○支援に効果的だった事前のアンケート

検証授業を行った3つの単元共に、子供の体験の有無・子供の願い等を知るために事前にアンケートをとった。

着目児を選ぶ際の参考になったり、選んだ着目児が考えを外に出して表現することがなかなかできない子供であるため、あらかじめ内面にある思いの一端を知っておくことができ、支援計画をたてるのに非常に役立った。

着目児Aの場合には、「迷子になるから探検したくない」という思いがアンケートによってわかった。その結果を見て教師が意図的に友達とかかわる場を作るという支援ができた。

着目児Bの場合は、まさにアンケート結果が着目児決定につながった。虫が「きらい」と答えているが、初めてのことへの心配や不安感がより強いBの思いを知り、虫捕りや世話をする活動の支援につながった。

着目児Cは、ほとんど自分の気持ちを言葉に出さないだけに、家庭での仕事の実態をつかむと同時に、単元への思いの一部を知ることができた。

(2) 友達とかかわりながら活動する場の設定

○友達と共通の体験をする楽しさ・喜びが味わえた。

・友達と一緒に町探検できたことの楽しさ、願いが実現できた喜びがある。

・プールでみんなで一緒にヤゴ捕りをした場合は、「○○ちゃんは1匹。僕は5匹だ」というようなゲーム的な感覚で楽しみながら捕まえる活動をしていたこと、学年全体でやったためにお互いに名前を知らないが、広い場所で捕まえることに夢中になりながら、声をかけたり競争していたりと無意識に子供どうしのかかわり合いができたこと、捕まえられたことで虫への興味がわいてきたことなどから、友達とかかわるのに絶妙な場であったといえる。第4公園での虫捕りの場も同じことがいえる。

○友達と情報交換する中で、友達の願いや活動のよさに気付いたり、自分のよさに気付いたりできた。またそ

の場は、自分の思いや願いがもて、活動するきっかけともなっている。その意味でここでとった手だては(1)の活動のきっかけとなる支援ともなった。

・朝の会の「宮崎台ニュース発表」の場

・実際に町探検をした場

・探検してきたことの発表会の場

・ヤゴ捕りの場

・第4公園での虫捕りの場

・1年生に虫のことを知らせる場

・上ばき洗いの場

・自分でできる仕事を教え合う場

・実践した仕事を発表する場

これらの場での活動から、新たな願いをもったり、活動を踏み出すきっかけとなったり、友達や先生に認められる場ともなった。

○共通の目的をもった友達どうしのグループの活動がかかわりが広がるのに有効だった。

活動の目的がお互いにはっきりわかっており、子供たちには活動の必然性があったためであろう。

・探検が同じ場所のグループ、発表方法が同じグループ

・虫捕りをするという目的が同じグループ、同じ虫の世話を

するグループ、同じ虫のことを紹介するグループ

・同じ仕事を教え合うグループ

(3) 友達とかかわる中で、思いや願いを追究し、「たくましさ」が育つ

着目児A, B, C 3人共、友達と自分なりのかかわり方をしながら、小さな自信を積み重ね、思いや願いを追究していった。その結果、それぞれすがたは異なるが、明らかにかかわり方が一歩進み、下記のような友達とかかわるすがたが見られるようになってきた。

○自分の言葉で友達に発表の仕方をアドバイスした。

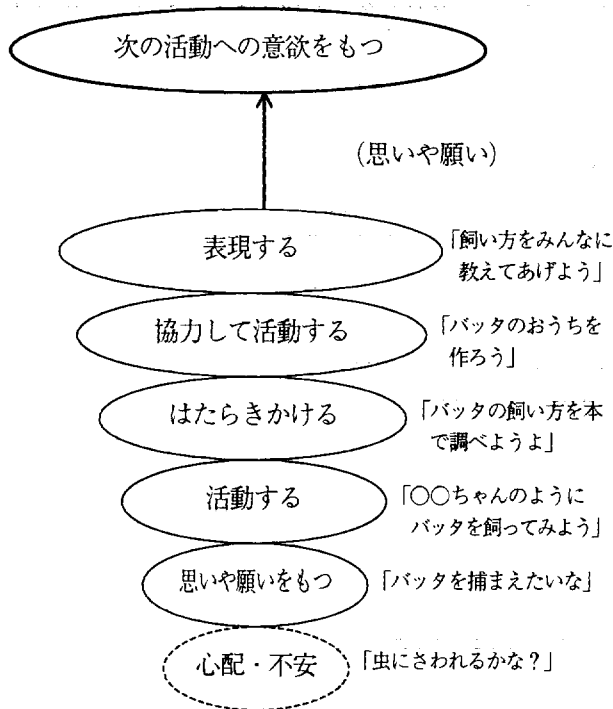
○1年生のような年下の子にカタツムリのことを教えた。

○自分の実践した仕事を、友達の前で説明したり質問に答えたりした。

今までは、友達からかかわってきてもらうことの方が多かったが、それが自分から友達に働きかけてかかわるようになったり、かかわる回数がふえたりしてきた。

このように、友達とかかわった3人の思いや願いを追究する過程をみると共通したものがあり、次ページにその過程を表した。

【着目児Bが、友達とかかわる中で思いや願いを
追究していったすがた】



第1に共通しているのは、3人とも未体験のことには不安や心配する気持ちが他の子以上に強いので、活動の始めの段階でいろいろな手だてをとりながらその気持ちを和らげるようにしたことである。その結果、自分なりにやってみみたいこと、行きたいところ、飼ってみたいものという願いがもてるようになり、活動がスタートしている。活動のきっかけとなる思いや願いがもてるような支援がいかに大切であるかがわかる。

第2にその子なりの友達とかかわり合っていくすがたがあるということである。本研究会議では、「友達とかかわる」ことを「共に励まし合い支え合いながら、自分の願いを追究し合うすがたであり、たくましい自己を形成しようとする過程」であるとしたが、この研究を通して見た子供のすがたは、徐々に友達とのかかわりが広がり、友達の願いとぶつかったり迷ったり友達のよさに気付いたりして、友達と「～し合い」ながら、自分の思いや願いを追究していくすがたであった。

着目児Aは協力して探検の準備をしたり、探検の約束や係を決めたりして一緒に町探検ができた。発表の準備の段階では友達の願いとぶつかり合うことも経験しながら、Yに教えてあげられるようになった。着目児Bは、友達と一緒に虫捕りをしたり、自分から誘ってえさを取りに行ったり、図鑑ですみかを調べたりした。着目児Cは友達に教わったり、友達のすることを見てまねをしたりしていたが、発表の時には実践した仕事を説明したり質問に答えたりした。

第3に言えることは、子供がこのように思いや願いを追究していくエネルギーとなっているのは、「自信」がもてたからである。「探検できた」「虫が捕れた」「上ばき洗いができた」「お米とぎができた」という満足感・成就感がもてたこと、そして発表の場面を初めとして、友達に認められたこと・ほめられたことによって自信がついたこと、これが新たな活動への意欲となっていく子供のすがたを見取ることができた。これはまさに本研究会議の考えている【思いや願いをもって自らの力で追究する力】即ち【たくましさ】であるといえる。子供は小さな「自信」を積み重ねることによって、大きく強い「自信」となり、自分の願いを追究していくものと考ええる。

最後に、このように友達とかかわる中で、思いや願いを追究した子供たちのすがたから、友達とかかわる中で育つ「たくましさ」について述べる。

着目児Aは、どうすれば自分の願いが実現するか少しでも見通しをもてたり、自分の願いや活動する幅を広げ、探検の計画が立てられたりできた。また町探検できたり照れながらも最後まで発表できたりした。

着目児Bは、虫を捕まえたり飼ったり世話をしたりし、しかもある程度継続した活動が実践できた。1年生に積極的に教えてあげることもできた。

着目児Cは、自分でできそうな仕事に挑戦し続けて実践できた。またそれを友達に言葉で説明できた。

そしてこの3人には現在次のようなすがたが見られる。

- 自分からすすんで振り返りカードを書いた。
- メモしたことに付け加えて発表できるようになった。
- 自分から友達に話しかけることがふえてきた。
- 自分から友達を誘うことがふえてきた。

以上のように、着目児が「自分から」「すすんで」働きかけることがふえてきた、そして、自分の思いを書いたり、言葉に出したり、行動をおこしたり、というようすがたが見られるようになったことから、自分の思いや願いを自分なりに「表現する力」が培われてきたと考える。

また、「表現する力」は活動や体験を繰り返す中で培われていくことを考えると、その意図をもった場の設定が必要なこと、子供たちに活動のきっかけとなる思いや願いがもてるように支援していくことの必要性を改めて感じた。

Ⅲ 研究の成果と

今後の課題

1. 研究の成果

- ・友達とかかわりながら思いや願いを追究することで

「たくましさ」が育ってほしいと願った3人の着目児について、その育ちを見取るために子供がどんな友達とどうかかわっていったかを記録したことにより、それが振り返りカードと合わせて見取りと支援に大切な資料となった。

・単元を通して子供のすがたを見取っていったために、励ましや支え、協力、葛藤等の友達とのたくさんのかかわりの中で、一つ一つ自分なりに乗り越えて思いや願いをかなえようとしていく子供のすがたを長い眼で見取ることができた。そして、その思いや願いがかなえられ、満足感や成就感を味わい自分のよさに気が付いていく。それが「自信」となって次の活動への意欲がわいていく子供たちのすがたを通して、この繰り返して私たちの願う「たくましさ」が育っていくことが、2年間の研究の中でわかってきた。

・友達とのかかわりがより広がるように、自信のもてない着目児3人に、みんなで共通の体験をする場、同じ目的をもった友達とかかわり合う場を設定した。その結果、3人の子供たちは友達と励まし合い支え合いながら、自信をもって思いや願いを追究していった。このことから本研究会議の育てたい力である【たくましさ】が育つ上で、意図的にかかわる場の設定は有効であったといえる。

・子供がどんな願いをもっているのか等の子供理解のために教師がとった事前のアンケートは、効果的な支援のために役立った。

・研究会議の目指す「たくましさ」が育つ子供のすがたをP. 51のように表したが、見取った子供のすがたを表したP. 63の図と比較すると、かかわり方は子供によって異なるが、心配や不安がなくなると、願いがもてるようになり、友達とかかわりながら自信をもって活動していった。このことから、本研究会議の考えた「たくましさ」が育つ子供のすがたの過程が、より明らかになった。

2. 今後の課題

・本研究会議で見取ったすがたは、一単元を通して、「友達とかかわる中で」という一側面から見た子供のすがたである。生活科という一教科の枠の中で、子供の内面的な育ちにかかわって、活動しているすがたから「～という力がついた」というところまで見取することは難しい。したがって、一人の子供から長期的に多くのすがたを見取り、その行動の背景となる資料も多く収集し、子供の育ちを長い目でとらえていくことが今後も要求される。

・1, 2年生の生活科の活動や体験において培われた自信や意欲がどのように教科や学年を越えて広がっていくのかを、「総合的な学習の時間」を考える上でも今後探

っていく必要がある。

・この研究では、子どもが思いや願いを追究していく過程で育つ力を「友達とかかわる中で」という視点から探したが、また別な視点から探してみると違った育ちが見取れるのではないだろうか。

おわりに

完全実施から6年目と言っても生活科はまだ新しい教科である。そのよさが他の学年にも、他の教科にも広がっていくことを願うものである。この研究をする中で、たくさんの子供たちが、生き生きと自分なりの願いをもって活動するすがたを見ることができた。

最後にこの研究を進めるにあたり、貴重なご指導・ご助言をいただきました先生方、そしてこの研究を支援して下さった研究担当者所属校の校長先生、並びに教職員の皆様に、心からお礼を申し上げたいと思います。

【参考文献】

梶田 叡一

『自己意識の心理学』

東京大学出版会 1988年

川島 一夫 編著

『図で読む生活科の教育法』

福村出版 1994年

植平 公子他5名

「子ども理解に立った指導と評価の研究—アセスメントを通して関心・意欲・態度を育てる教師の支援について」
川崎市総合教育センター 1995年

片上 宗二

『オープンエンド化による生活科授業の創造』

明治図書 1995年

有田 和正

『生活科で育てる々新しい学力々』

明治図書 1996年

嶋野 道弘

『生活科の子供論—一人一人が輝いてみえますか』

明治図書 1996年

無藤 隆

『生活科の心理学』

初教出版 1997年

【指導助言者】

電気通信大学名誉教授

滝沢 武久

(川崎市総合教育センター専門員)

お茶の水女子大学教授

無藤 隆

広島大学教授・広島大学付属小学校長

片上 宗二

川崎市立小学校生活科教育研究会長

嶋嶋 輝一

(川崎市立殿町小学校長)